

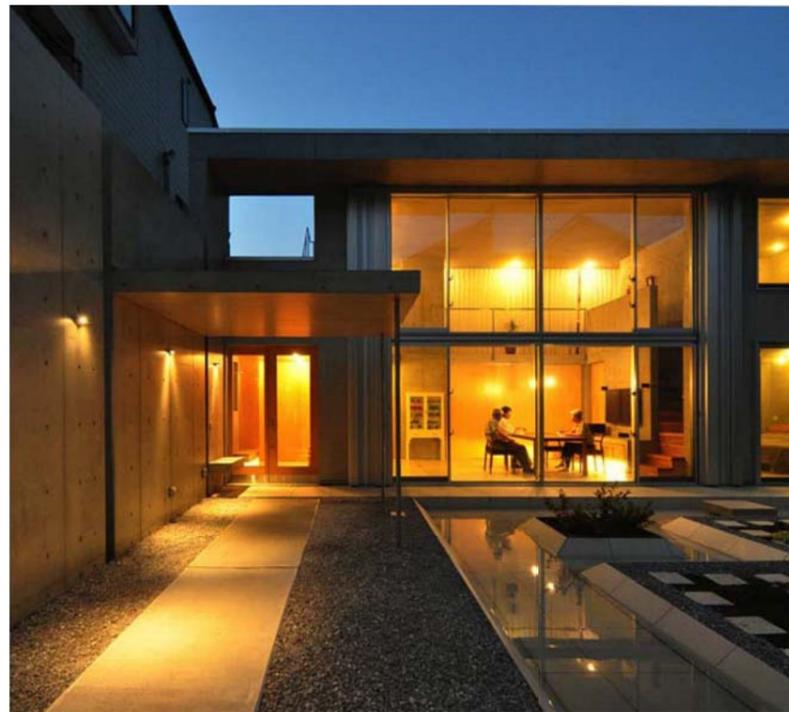
藤沢市街地に建つ終の住処（ついのすみか）
囲み庭の家

La Casa col Cortiletto Interno

都市化が進み、中高層マンションが並ぶ市街地の土地。長年住み慣れたその土地に、80代の老夫婦が親族の家と庭を囲んだ、終の住処（ついのすみか）として建替えた住まい。夏期に冷気をもたらす水盤や、診察室のレイアウトと新居の書斎机の配置、医療器具棚の再生利用等、旧住宅の思い出を発展的に継承している。環境を生かして、バリアフリーな室内に風景を取り入れ、南に開けた立地を生かし、アプローチや庭園の緑の広がりやに段差無く一体的に連続した、低層の空間構成としている。南面する吹抜の大開口から、冬期には隅々まで太陽が差込み、夏期には、深い庇と緑陰やアルミ縦ルーバーで制御された水盤の反射光が、涼やかに揺らめく。外断熱、RC躯体蓄熱、高气密といった基本性能の充実に加え、湘南地方の温暖な気候を最大限に生かした、太陽熱、自然通風、ダイレクトゲイン等の、ジャンクなエネルギー（東大 前 真之教授の表現）を効果的に利用。「建築の基礎体力」を重視した、大袈裟でない健全なエコ建築をめざしている。



▲旧医院、旧住宅から継承された構成。
南面して太陽光を最大限に利用しつつ、夏期は制御する仕組み



▲アプローチの水盤に映る室内の灯。
西側のRC壁は、隣地の駐車場の将来マンション開発対策も兼ねる



▲旧住宅の水盤 ▲かつての病院の診察室と医療器具棚



▲再利用した医療器具棚のある食堂と引戸で分離可能な厨房



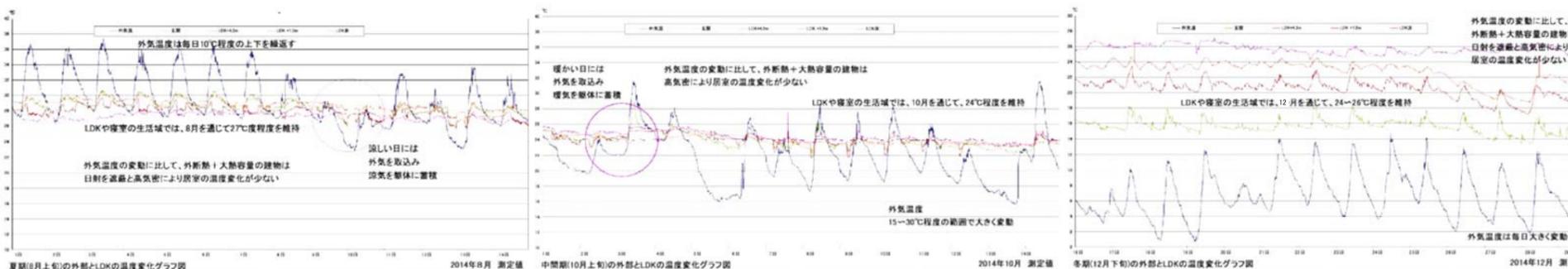
▲屋上より南側菜園、水盤をのぞむ、庭園の散水、水盤の給水には雨水タンクへの超流水を利用



▲水盤の先に広がる囲み庭、庇と縦ルーバーで太陽光を制御する ▲囲み庭の水盤とカーポート、エントランス門扉までのアプローチには柑橘系の木々



▲半開状態の外付可動アルミ縦ルーバーから漏れる室内の灯と囲まれた「囲み庭」の様子



▲2014年初夏から、多数のセンサーを設置し、定量的な評価作業が現在継続している。
これまでのところ、外気温の激しい変化のなかでも、季節と時間に関わらず変化の極めて少ない安定的な室内気候が定量的に検証されている。



応募代表者 | 丸子 淳

mcja 丸子 淳 + 根本 理

東京都出身 神奈川県立湘南高等学校卒業
 1989- 東京大学工学部建築学科卒業後、
 日本設計を経て、mcja共同設立
 2002-03 文化庁派遣芸術家(ローマ)
 2003-05 国立ローマ大学 "La Sapienza" 建築学部
 2002-03 Massimiliano Fuksas Architetto, Roma
 2003-06 Studio LABics Architettura, Roma
 2014 合同会社mcjaに改組